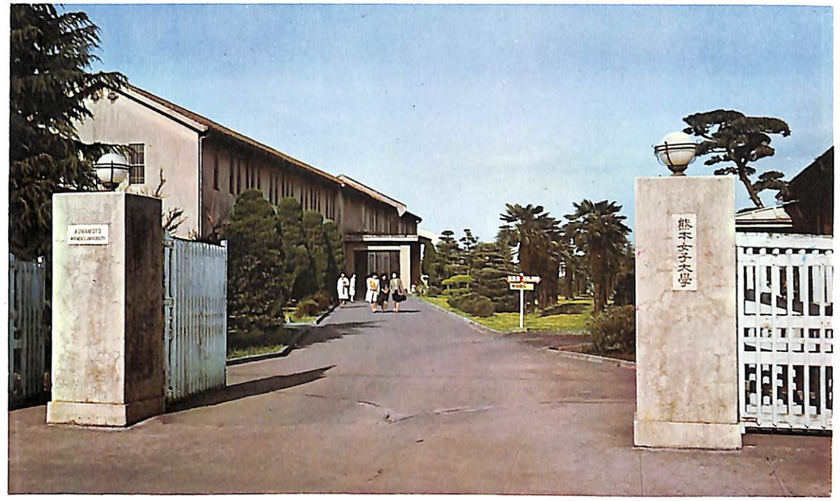
創立15周年記念誌

熊本女子大学

377.29
1



校歌

一、見はるかす　阿蘇の山なみ
新しき　朝の光よ
むらさきに　山はにほひて
ときいろに　輝く校舎
集ひくる　乙女を見よや
科学する　叡知の瞳
思索する　清きおもざし
さはやけき　みどりの風は
若き日の　よろこび歌ふ
あゝわれら　命たたへん

二、まかゞよふ　空をかぎれる
金峰の　峰の光よ
静もれる　夕の学園
夢多き　乙女の胸の
琴線に　触るゝは何ぞ
人の世に　愛をもとめて
真理への　道をたどらん
さはやけき　みどりの風は
若き日の　望みを歌ふ
あゝわれら　命たたへん

熊本県知事　寺　本　広　作

国力推進の一翼

日本の女子教育が男子のそれに比して著しく出発のおくれたことは周知のとおりです。

旧藩時代はいうも更なり、学制頒布以来も尋常小学校を卒えればよい方で、高等科に学ぶものはエリート族とされました。それが大正、昭和と進むにつれて、高等女学校(現高校)までは学びたいという程度に向上したのですが、戦後男女同権が高唱されて、女子教育も大学程度の普及が目標とされるに至り、本県にも公立の女子大学が生まれることとなりました。その熊本女子大学が、早くも創立15周年を迎えたということは、女子教育のレベルが飛躍的に上昇した具体的実証であって、まことにご同慶に堪えません。

男女両性の均衡した実力が、国運推進の両翼たるを思い、更に一層の拡大充実をお祈りする次第です。

学長　北　村　直　躬

挨　　拶

世界大戦後のわが国土荒廃の中、熊本女子大学は大学新制度施行と共にいち早く昭和24年に発足したのであるが、これは偏に熊本県当局並びに県議会の強い熱意と地元関係各位の温かい支援によるものである。爾後、十有五年施設の拡充と教授陣容の充実とにより校運隆盛に赴き、現在においては卒業生約1,700名、入学志願者数は定員の約7倍強に達する盛況を看るに至ったことは、あまねく内外各方面の御理解と御激励の賜である。まことに本県教育界の振興のために御同慶に堪えない次第である。

去る昭和26年、米国教育使節団の来朝を迎え、その要請により私は本邦女子大学教育の将来の指針につき所見を陳述する機会を得たのであるが、私はその際に女性の自主性、社会性、創造性、知性の四綱領を挙げたのである。この四綱領こそは学長としての本学教育の信念である。

ここに創立15周年の記念式典の日を迎えるに当り、これまで本学に寄せられた江湖各位の御芳情に対し深甚の謝意を表すると共に、本学将来の発展のために一層の御援助を賜わるよう切望する次第である。

熊本県議会議長　園　田　清　充

創立15周年を迎えて

熊本女子大学も創立15周年を迎え、まことにめでたいかぎりで衷心よりお祝い申しあげます。

この15年間には、県政の上でも新憲法のもとに、かってない幾多の制度的改革がおこなわれたが、民主主義を標傍し、理想的な平和社会への実現を目ざして努力を続けて来た結果、産業は年と共によみがえり、あらゆる面において、戦前をしのぐ飛躍的な発展をとげるにいたった。特に教育の力が平和日本の民主国家建設の大きな推進力となってきた業績は大きく、戦後女子の社会的地位がひらかれ、女子教育はより以上に重要となり女子大学の創設が全国的に見られ、本大学も以来15年の歳月と共に今日の発展をとげ、この間多くの人材を世に送り出し現代社会各階に婦人層の指導的地位にあって活躍されており、大学も亦不動の基盤の上に、本日の盛典を迎えたことは慶賀に堪えない次第である。

私は、明るく健全な家庭生活を基盤として清浄な社会環境を作り、真に平和で、民主的な国家社会を建設するにない手として、むしろ男性以上に、女性の力に期待したいと思うのである。学長はじめ、教職員各位には、この15年を顧みて、反省と研究を加え、今後の教育目標の確立に資し、本大学の使命達成に一段の御精進を念願するものである。

期成会長　伊　豆　富　人

祝　　辞

熊本女子大学創立15周年記念式典に当り、祝辞を申上げます機会を賜わりましたことは、私の最も光栄とするところであります。ここにその沿革を顧みまするに、昭和22年熊本県立女子専門学校として発足し、24年熊本女子大学に昇格し、その間、着々として堅実なる発達を遂げ、もって今日に至りました。その間に、多数の卒業生を社会に送り出されたことは、女性の知見、教養のレベルの向上、ひいては一般社会の向上に貢献されたもので、その教育上の功績は甚大なるものがあります。また、熊本女子大学が、このような発達を遂げたのは、熊本女子専門学校を創立されて以来20年、全身全霊を傾けて経営の衡に当られた、学長北村直躬博士の誠実な人格、深き学識、高き識見、勝れた経営的才能、努力と共に、全教職員各位が、北村学長を中心として、一致団結、校運の発展に努力された結果で、衷心より敬意を表しますと共に、国家社会のため、更に一層の発展を祈って祝辞とします。

15周年を祝い思いを過去に走せる

私は、昭和25年４月本学に赴任した。
当時本学の母体は、今の熊本城天守閣の所にあった旧六師団司令部の古い洋館であった。本学の発祥とも言うべき女専第２回生が残っていた。この仮校舎の周囲には沢山の桜が満開してとても美しく今でも深く印象に残っている。同年５月末、現在の地に新校舎の一部ができ上り、移転が行われた。女専の学生がリヤカーを押したり引いたりして、涙ぐましい活躍をしたのも忘れられぬ思い出の一つである。当時広過ぎると思われた校庭には木立が殆ど無く、私が植樹委員長を承わり、前局長の平山さんと講師の林田さんと３人で、数年がかりで植樹に取り組んだ。費用の大部分は先生方の御寄附で賄われた。本門を入って先ず目につく勢のよい棕梠の行列は、今でこそ立派な大木となっているが、当時は５尺足らずのものでしかなかった。旧体育館入口の両側のすだれ梅は、特に私の懇望で植えたものである。校庭の樹木の繁栄と共に、本学の成し遂げた目覚ましい発展に対し満腔の悦びを捧げる次第である。（沼正治）

名誉教授　沼　　正　治

名誉教授　故　大内覚之助

15周年を祝して

北村学長を中心とする熊本女子大学の生みの親、育ての親となられた方々の今日迄の労苦を私は痛い程に感ずる。凡そ大学は研究と教育の府である。創立当時研究とは何ぞや、その方法はと、激務のなかに自ら指導に当られた学長の姿を私は忘れることが出来ない。今日学位取得者の多きを誇り得る大学となったのも故なしとしない。又学殖深い教師による教育効果が挙らぬ筈があるであろうか。

大学の物的条件については、あの熊本城跡の仮学舎を知る者にとっては、渡鹿原頭の現在の施設は全く夢の殿堂である。

紅唇、紅衣、ハイヒール姿をいくらも教室に見かけた時代の学生と、今日のそれとを比較すれば、外見と内容との関係、相違は自ら明かであるであろう。

各方面の理解と援助を受けるためには、まず受けるに値する実績をあげねばならない。過去15年にわたる女大の忍苦の歩みを想う時、私はよくぞこゝまでと感激と歓喜とに胸ふさがるおもいである。

しかし本番はこれから、老兵は死せず、ただ消え去った私は熊本女子大学の健実な発展を日夜祈っている。

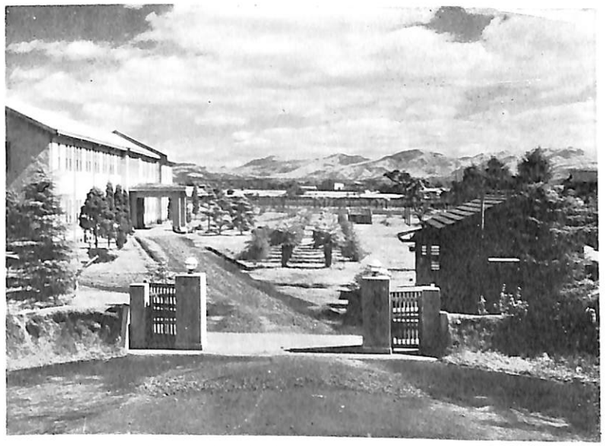
（大内覚之助）

女子大の発展を祈りて

辞任してからすでに五年、在職中は多少不平不満もあったのですが、いまでは、郷愁だけでいっぱいです。この春、帰熊した機会に大学をたずね、建学の当時理想とされていたものが次第に定着し、伝統化されているのをみて、いまさらながら学長北村先生の不動の信念と、その高邁な抱負に敬服しました。

日本が生んだ最高の思想家道元は、大学（当時の叢林）について、「たとい衆おおくとも抱道の人なければ、すなわちこれ小叢林たり。たとい院小なりといえども、抱道の人あれば、すなわちこれ大叢林なり。」と。つまり純一に真理を探求する教授と学生との、人間的接触こそが、大学の条件だというのです。マンモス大学に勤務して、つくづく熊本女大時代がなつかしまれます。（圭室諦成）

名誉教授　圭　室　諦　成



正門から阿蘇の連峯を望む

第１回開学記念式典　本学は熊本県立女子専門学校を母体とし、昭和24年３月25日、九州における最初の４年制女子大学として発足した。初代学長には女子専門学校長を兼務して、現学長医学博士北村直躬が就任した。ついで５月２日には第１回の入学式を挙行し、文学科、生活学科合計80名の学生と10余名の聴講生を迎えた。

世相はまだ戦後の混乱と低迷にあけくれていたが、はじめて開かれた女性文化の殿堂に対して、各方面からよせられる期待は大きかった。こうして楠若葉のもえる５月21日午前11時から、熊本城本丸にあった仮校舎の前庭において、盛大な開学記念式典が行なわれた。

第一回開学記念式典風景（その１）

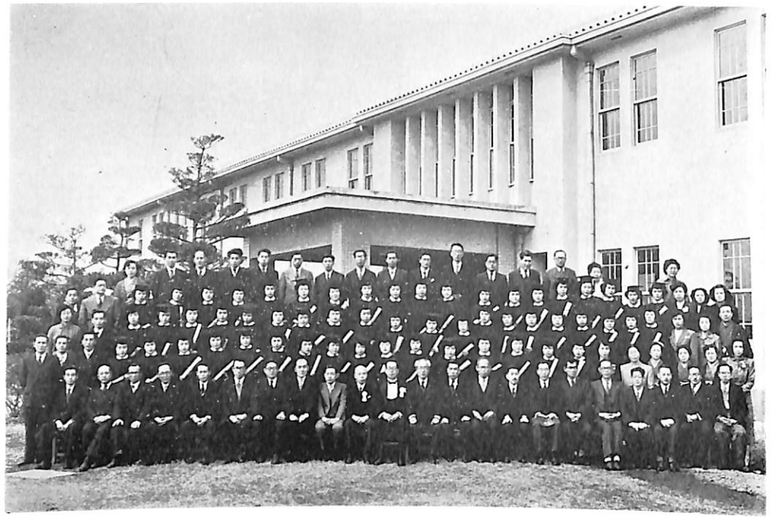
（その２）

開学記念式典　当日は前熊本県知事故桜井三郎氏をはじめ、多数の来賓をむかえ、女子大、女専共催のもとにかずかずの行事がくりひろげられた。学外では学術講演会、学内では古典玩具と現代玩具の展示会、女流美術小展、ファッション展、女子高校生卓球試合、バザーなどが２日間にわたって催され、せまい仮校舎は見学者の群れでにぎわった。

熊本県立女子専門学校第一回卒業生

県立女専、女子大学旧校舎

県立女子専門学校は昭和22年４月１日、熊本市藪之内町にあった県立第１高等女学校内の仮校舎において新しく発足した。その後同23年９月、熊本城本丸町１番地にあった元第６師団司令部跡の仮校舎に移転した。当時の校舎は運動場もなく、殺風景な軍施設のままであったが、教官も学生も希望に胸をふくらませていた。こうして同25年３月28日には、女専第１回卒業生を世に送った。当日の卒業生は英文科21名、生活科31名、被服科37名計89名。女専第２回卒業生の多くは新しく誕生した女子大に移ったため総数49名となり、翌26年３月３日最終回の卒業となった。ここに県立女子専門学校は同年３月31日をもって発展的に解消した。



熊本女子大学第一回卒業生

熊本女子大学新聞

母校よさらば

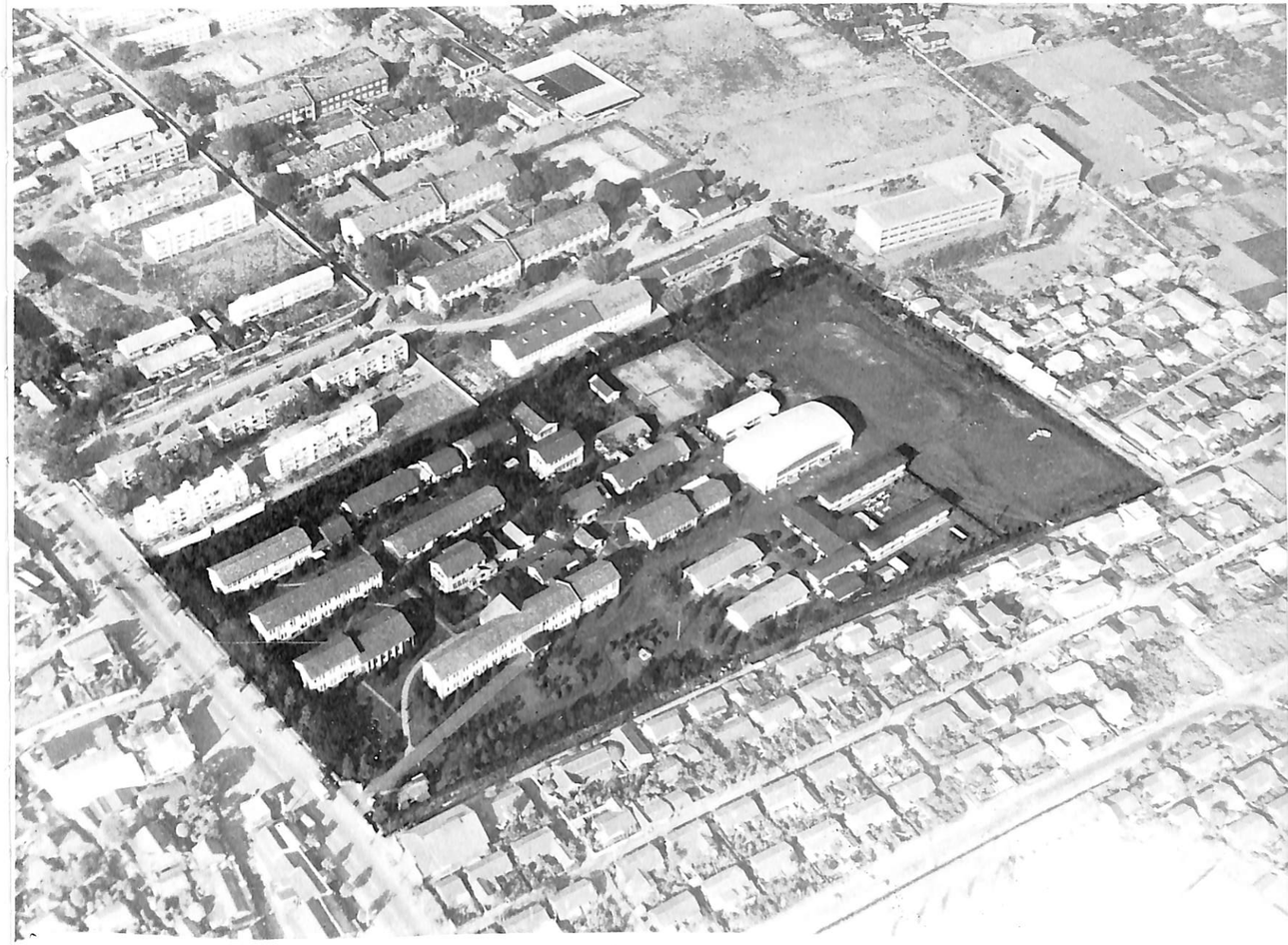
第一回卒業生巣立つ

然し社会は？

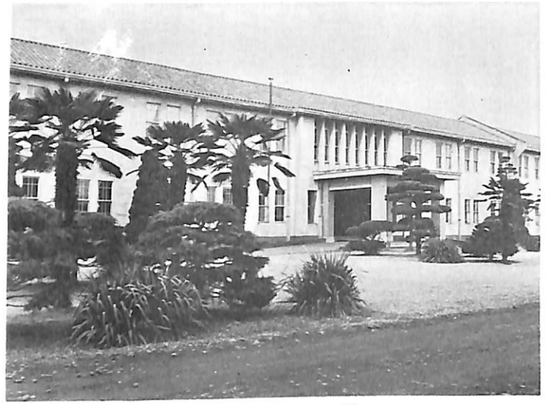
これからの卒業生に望む

田代学生部長

移転当時の校舎



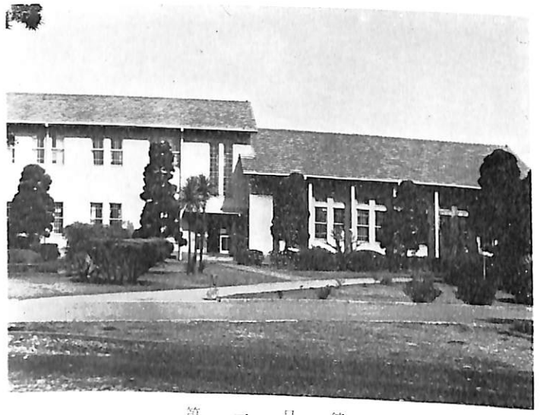
女子大全景（航空写真）



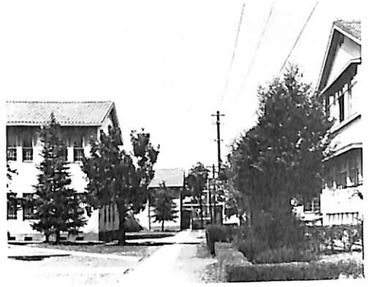
本　　館

西　講　堂

熊本女子大學



第　一　号　館



中央建物

泉　　水

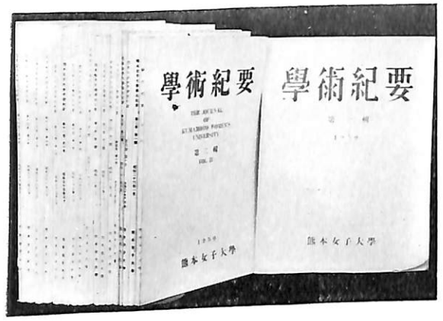
棕　梠　並　木

学長　北村直躬胸像

図　　書　　館

図書館閲覧室

図書館　昭和39年10月の増築改装によって面目を一新した。本館1階には各種辞典を置いた閲覧室、2階には学生の幅広い教養に資するための専門的図書や文学全集等を収めた学生文庫と閲覧室とがあり、学生が自由に関係図書を利用できるようになっている。なお、土蔵造りを思わせる2棟の書庫には和漢洋の書籍をはじめ、多年にわたって収集された古文書、古写本、新聞資料が備わっていて学術研究の中心的機能を果している。

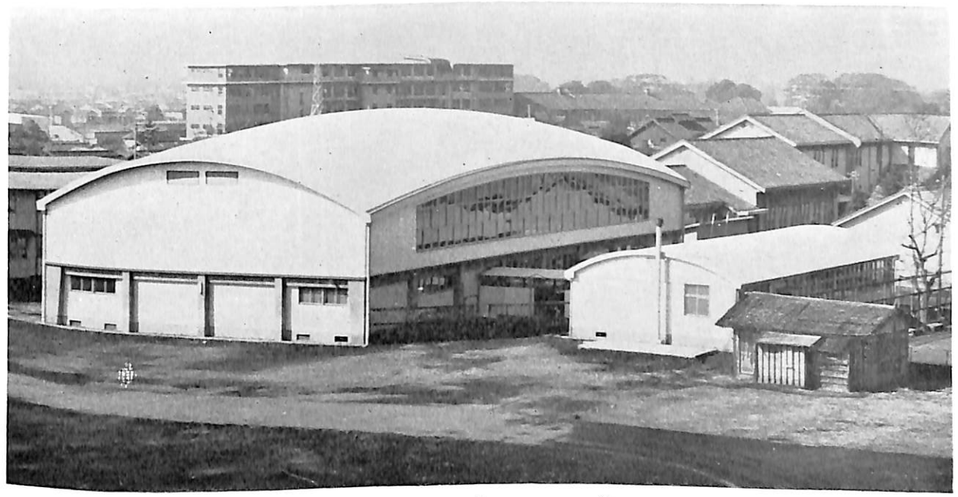


学術紀要　熊本女子大学学術紀要は本学教官の研究成果を掲載する、総合的な発表機関誌である。その内容は人文科学系と自然科学系の2部門からなり、昭和25年3月創刊以来、貴重な研究論文が発表され、各方面から注目をあびている。このほかにも本学では、学科や研究室を中心に発刊される数種の研究発表機関誌があり、その内容は年を追ってますます充実しつつある。

本館は昭和39年3月31日、総工費2,000万円をもって完成した近代的な女子体育施設で、総面積1049.40平方メートルを有する。隣接して体育と音楽の両研究室や講義室があり、更衣室やシャワーの設備も行きとどいている。明るく乳白色にかがやく建物は、緑の芝生に映えて美しい。

体育館の内部は各種のスポーツが同時にできるだけのゆとりがあり、広いステージは音楽や舞踊の練習など利用価値が大きい。とくに窓が広く採光と通気が考慮され、アーチ型をなす天井には500ルックス以上の照明装置が付いている。このホールは学生の日常体育実技に使用されるほか、各種のスポーツ練習や試合その他催し物に活用され、学生の体位向上を計るとともに、多くの有力な選手を養成している。

体育館内部



体　　育　　館

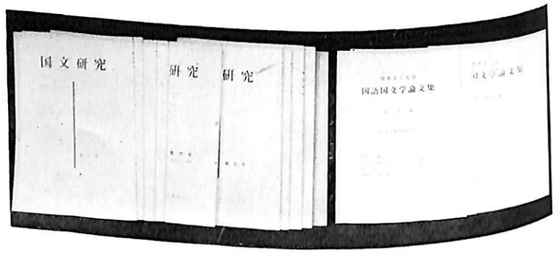
英文学研究室

熊本洋学校旧蔵図書

明治4年（1871年）熊本藩では新しい時代に生きる多くの人材を養成するため、米人教師ジェーンスをむかえ、熊本洋学校を創立した。当時使用されていたこれらの教科書や参考図書は、わが国の英語研究史上、教育史上重要な資料である。

国文学研究室

国文学科では、教官の研究発表誌として「国語国文学論文集」を、また学生、卒業生をも加えた「国文研究」を刊行し、それぞれ3号と10号を数えている。



社会衛生学研究室

洗浄力試験

被服実習

服飾美学研究室